

ギュスターヴ・クールベ「狩人のための連作」解釈の試み

山橋 あおい（国立西洋美術館）

ギュスターヴ・クールベ（1819-1877）による 1861 年のサロン出品作のうち、鹿狩りを主題とする三点の絵画—すなわち《水辺の雄鹿、猟犬狩猟》（マルセイユ美術館）、《春の発情期、雄鹿の闘い》（オルセー美術館）、《猟犬係》（ノイエ・ピナコテーク）は、画家みずから「狩人のための連作」と定義する作品である。本連作に関する先行研究では、まずノックリン（1967）が、同時代の英国人画家からの図像的影響を指摘した。これは以降のクールベ研究の方向性を決定づけ、60 年代の動物主題については概してその通俗性ないし商業性と、50 年代の芸術実践からの断絶が論じられる傾向にある。しかし、本連作において、同時代の図像からの影響のみでは説明できない要素が残ることも事実だ。他方で、クールベ作品における狩りの獲物のモチーフは、（しばしば精神分析的方法論を援用し）画家自身の迫害の隠喩としても解釈されてきた。とはいえ、それらの言説は画家個人の伝記的枠組みの内側にとどまると言わざるをえない。

本発表ではコンテクスト論の立場から、動物という主題が多様な社会的・文化的要因と結びつくことをあきらかにしつつ、作品の具体的な着想源および意味内容の解明をつうじ、本連作を 50 年代の画家の野心的試みの延長に位置づけたい。

19 世紀フランスにおいて、観相学・骨相学の流行や新たな科学的知見の獲得は、人間と動物のアナロジーに対する熱中を呼び、両者を連続した一体の自然と捉える価値観を生じさせた。一方、フリーエ主義者アルフォンス・トゥスネル（1803-1885）の著作『動物の精神：フランスの狩猟と情念動物学』（1847 初版）は、人間と動物の区別に先験的な概念として「情念」を想定し、両者を根源的に同一の存在と見なすシャルル・フリーエの思想を拡大したものである。トゥスネルは諸情念にふさわしい動物を種ごとに分類・記述し、人間社会における特定の職種や階層のレッテルを貼ることで、動物を媒介とする人間の自覚を促した。

同書は以下の点で「狩人のための連作」と比較しうる。第一は、狩猟という大きな文脈に立脚しながら、個別の動物の行動や生態を主体的に記述する構造である。第二に、雄鹿に関するテキストの具体的記述が三点の絵画の内容に近似するのみならず、「春の発情期」という不可解な主題の説明をも可能にする。さらに、その動物に付与された擬人的イメージは、先行する自画像においても表明された「迫害の犠牲者にして救済者としての芸術家」というクールベの自己イメージに一致する。画家の共和主義／社会主義的政治思想に根ざす人間関係を踏まえるならば、同書はけっして彼に疎遠でなかったと言いうる。また、同時代史料には、画家当人とトゥスネルの親交を示唆する記述も確認される。これらに基づき、「狩人のための連作」においてクールベ

が、『動物の精神』の構造と具体的な動物表象に依拠し、上述の自己イメージの形成を試みたという解釈の可能性を提示する。